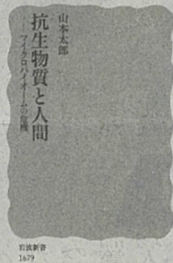


抗生物質と人間

山本 太郎著

抗生物質は身近な薬だ。ちょっとした風邪で処方してもらう人も多いだろう。ところが抗生物質の摂取は肥満、糖尿病、アレルギー疾患など現代人が抱える数々の病気の原因になっている可能性があるという。熱帯感染症学などが専門で医師の著者が、その仕組みを説明する。

人間の体内には腸などに100種類、100兆個を超える常在菌がすみ、重量は数キログラムに及ぶ。遺伝子総数は人間の全遺伝子の100倍以上だ。多様な細菌が「宿主であるヒトと巨大なネットワークを構成し、総体



使いすぎがもたらすリスク

として、競争と協調を繰り返す」という。そして「ヒトは、細菌の存在がなければ、一日たりとも生存できない」。

ところが、病原菌を押さえ込むために投与された抗生物質は常在菌にも悪影響を及ぼし、有用な菌を殺して病気の発生を招く場合がある。多くの子どもは生後間もないうちに何度も抗生物質を摂取するが、マウスの実験ではその影響が一生続く可能性も示唆されている。

抗生物質の使いすぎは薬剤が効かない耐性菌の増加にもつながり、2050年には薬剤耐性菌による死者は毎年1000万人に達するとの予測もある。抗生物質が多くの人を感染症から守ってくれているのは事実だが、依存しすぎるリスクも大きいことを再認識させられる。(岩

波新書・760円)